

# 幼児教育の独自性はどこにあるのか(1)

矢野 智司

## 遊ぶ子どももの力

この連載では、幼児教育の独自性について考えてみたいと思います。これまでも幼児教育が学校教育とどこが違うのか、幼児教育の独自性がどこにあるのか多くの人々が論じてきました。その意味では、このテーマはけっして新しいテーマではないのですが、少子化が進み、子どもの生活がこれまで以上に大人の強いまなざしによって囲わ

れ始めているなかで、幼児教育が学校教育に回収されてしまわないためにも、いったい幼児教育の特質が何であるかについて、明らかにする必要があります。あると思います。

そのために、まずは遊びやしつけといった幼児教育のなかの具体的な事象、遊具や絵本や動物といったメディアを取りあげて、そこからこのテ

マについて考えることにしたいと思います。まず一回目は、幼児教育において学校教育にないものとして、「遊び」を取りあげることに行きましょう。

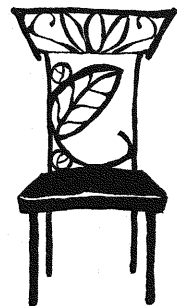
『幼児の教育』でも、多くの人たちが繰り返し幼児期における遊びの大切さについて述べています。いまさら遊びの大切さについて、新たに何を付け加えることがあるのでしょうか。しかし、あらためて子どもにとって本当に遊びは大切なのだろうかと問われるとどうでしょうか。なぜ大切なのでしょうか。このような問いを出されたとき、保育者の頭にすぐに浮かびあがるイメージは、楽しそうに飽きることなく繰り返し遊ぶ子どもの姿でしょう。その姿を思い浮かべつつ、保育者はこの問いにたいして「なぜ子どもに遊びが大切かという点、つまり遊びは子どもの発達にとって不可欠だからです」というように答えるのが、オーソドックスな答えでしょう。

そのとおりです。子どもは遊びを通して実にさまざまな能力を発達させます。どの保育者も保育原論の授業で得た知識としてだけではなく、保育の経験を通してこのことの意味をよく知っています。走ることやジャンプすることから細々とした手先の使い方まで、遊びを通して子どもは体の使い方を学ぶことができます。言葉の使い方や、さまざまな社会的あるいは科学的な認識と、本当に子どもは短い期間に多くの事柄が遊びを通してできるようになっていきます。

しかし、このような遊びのとらえ方は、遊びを本当には大切にしない遊び観ではないでしょうか。私にはこのような答えより、遊びが問われたときにまず最初に浮かぶ子どもの楽しそうな姿のイメージの方が大切なことのように思われます。子どもは楽しいから遊ぶ、遊びたいから遊ぶ、だから遊びは大切と試してみましよう。このように

いうと、なるほどそうだ、子どもは遊びによって精神の安定を得ているのだからと考えるかもしれませんが。しかしこの納得の仕方、最初の答えである「発達にとって大切だから」と実のところかわりはしません。この納得の仕方、遊びは二次的な意味しかもつことができず、最初の答えと同様、遊びを子どもの発達の手段とみなしているのです。

子どもは発達するために遊んでいるのではないですし、ましてや精神の安定を得るために遊んでいるのではありません。ただ子どもは遊びたいから遊んでいるのです。それが結果として発達を促すことになるかもしれませんし、また精神的な安定を得ることもあるかもしれないだけです。しかし、それは結果として偶然に得られることであって、遊ぶときに子どもに目的とされることではありません。



この遊びの見方の違いは決して小さいものではありません。もし遊びが子どもの発達を促すから重要であるのなら、遊び以上により効率よく発達を促す方法があれば、遊びは幼児教育に必要ななくなってしまいます。たとえば、この遊びの原理にしたがえば、より組織だったルールを持ち体系だった発達を促すスポーツやゲームが、遊びに取って代わることが可能です。あるいは遊びに任せず発達のための組織だった訓練によって、さまざまな認識能力を高めることも可能です。この「発達のための遊び」という原理では、学校教育にたいして遊びが子どもに不可欠であることを弁

護することはできないのです。

私たちの日常の行為の多くは、何か目的を実現しようとするものです。ですからその目的実現にとって、目的を実現するまでの行為は手段となります。仕事を例に取るのが一番わかりやすいでしょう。仕事には仕事の目的があり、仕事のプロセスはその目的を実現するための手段です。計画を立て、計画に必要な材料や道具をそろえ、予期せず生じるさまざまな障害を克服し、目的を実現していきます。さらに仕事は目的を実現するにとどまらず、仕事をした人にとってそれは経験となり、次の仕事に役立つ能力となります。発達はこのような経験によって実現されていきます。

ところが遊びには、遊ぶことそのこと以外にはどのような目的もありません。つまり遊ぶことそのことが喜びであり目的なのです。反対に、その行為自体がおもしろくて、その行為がそれ自体の

ためになされるときには、何でも遊びになつてしまいます。罰として与えられた庭掃除でさえ、みんなで葉っぱを競って集め始めれば掃除ゲームのようになり、それ自体が楽しい遊びとなります。このようなことは、遊びの研究書には必ず書かれていることです。しかし、保育者や教育学者や心理学者の頭のなかには、発達や教育のほうが遊びより大切だという前提があるので、遊びをそのための手段としてとらえてしまうのです。

保育者も教育学者も心理学者も、遊びには遊びを超えた目的がないという遊びの本質を、もつと真剣に受け止めるべきだと思います。遊びは日常生活を彩る補完物のように思われますが、遊びは普段の有用性を求める生活とは別の原理を示しているのです。何かのためにするのではない遊び！ 有用な生産活動とは無縁の遊び！むしろその有用で生産的な活動を破壊するのが遊びの本質

なのです。もつと有効に有用なことのために使えたかもしれないエネルギーや時間を、惜しげもなく役に立たないことに蕩<sup>とうじん</sup>尽<sup>じん</sup>することが遊びの醍醐味なのです。

その瞬間、子どもは世界のうちに深く溶け込み世界との一体化が生じます。遊びにおいてはもはや子どもが遊んでいるのではなく、ダイナミックな遊びのなかに子どもが溶けていきます。まるで遊び自体が主人公のようになり、子どものコントロールを超えて自在に進行していきます。遊びのなかで新たな遊びがつぎつぎ生まれていきます。

このなかで、子どもは遊んでいることを意識しないまま、現実と遊びとを混乱させることなく、自在に世界のうちに生きることになります。子どもは、泥で作った団子をあたかも本当の団子のように食べるふりをしますが、実際に口の中に入れたりしません。それでもそれは泥の塊ではなく、お

いしそうな団子なのです。

あるいは、子どもはよく積み木遊びをします。が、そのとき、せっかく苦勞して高く積みあげた積み木の塔を、惜しげもなく自分で破壊することがあります。保育者や親たちは、積み木を積む行為は、仕事のような生産性を感じさせるので肯定的に評価しますが、積みあがった積み木の塔を壊してしまうことには否定的です。しかし、この破壊する否定の力に遊びのダイナミクスがありません。そもそも遊びは仕事のもつ有用性や生産性を否定するものであり、有用性の世界を突破するものです。したがって、作り出したものを壊すことは、遊びの原理にかなっていることでもあるのです。こうして遊びにおいて、子どもたちは秩序だった形態を作り出す楽しさとともに、それを一瞬のうちに消し去り無にすることの喜びを体験するのである。

子どもは遊びの世界の住人だといえるでしょう。

この遊びの世界の住人に、仕事を教えることが教育の目的だと考えられてきたことには十分な理由があります。仕事は物や人を目的達成のための手段とするところから、物を人と目的実現のために役に立つという一点でかわり方を要請します。そのために仕事では、物や人との全体的なかわりを実現できません。しかし、不思議なことに遊びでは、有用性の世界を破壊することで、物や人との全体的なかわりを取りもどすことができます。子どもは仕事を学ぶとともに、子どもには遊びが不可欠であり、より深く遊びの体験が深められる必要があります。生きている喜びの源泉はこのような深い体験にあります。このような体験を生きたことで世界にたいする根源的な信頼感や安心感を持つことができるのですから、発達はこの体験を苗床にしているのだといってもよいで

しょう。

ここに出てくる有用な生産活動の破壊から生まれる喜びの体験は、遊び以外にも見ることができません。絵本のなかにも、同様の体験を見ることができません。また動物との生活のなかにも見ることができません。また見返りを求めない贈与のなかにも、同様の世界と一体化する体験を見ることができません。もちろん子どもは発達しなければなりません。子どもの遊びをただ見ているだけでは幼児教育になりません。そのことについては最後にまた述べたいと思いますが、もう少しこの発達には直接つながらない有用性の世界を破壊する体験について見ていきたいと思えます。それは子どもという不思議なありようにあらためて出会うことでもあります。次回は動物になる子どもについて考えてみましょう。あなたの子どもたちは動物になつていませんか？

(京都大学)